

佳作

「車輪の下」アウソウジュ

福岡県 明治学園中学校一年 大内田 康聡

僕はこの夏、東京研修に参加した。研修では、仲間と一緒に様々な機関を回り、多くの先輩方の話を聞いて、有意義な時間を過ごすことが出来た。なかでも僕にとって一番印象深かったのは、憧れの東京大学で、明治学園卒業の先生方の講演を聴けたことだ。

東洋大学の中野剛治先生は、具体的な勉強方法等もわかりやすく説明してくださった。そして最後に、僕たちの

「これからのような生き方をしたいとお考えですか。」

という質問に対して、少し考えてからこうお答えになった。

「自分が楽しいと考えるテーマを見つけて、それを研究していききたいです。」

もっと壮大な、難しい答えを期待していた僕は、正直に言うとし少し拍子抜けした。「楽しいと考えるテーマ」が、何だか楽をしているようで、それでいいのかと思ってしまった。

しかし、東京から帰って、夏休みの課題図書『車輪の下』を読んだ時に、改めて中野先生の言葉がよみがえってきた。『車輪の下』の主人公ハンスは、とても勉強が出来る優秀な生徒だったが、州試験に合格して神学校に通うようになってから、自分が学ぶことの意味を見いだせなくなる。どうしてハンスは勉強しなくなってしまったのか、僕は自分なりに考えてみた。理由はいくつかあるだろうけれど、一番大きな原因は、ハンスが「楽しいと考える勉強」をして来なかったからではないだろうか。

ハンスは、期待してくれている父親や、先生方に応えるために、努力を重ねてきた。やりたいことを我慢し、睡眠時間も削ってひたすら勉強した。でもそれは「勉強ができる良い子」になって、周りから認めてもらったためだった。もちろん、それは素晴らしいことだけれど、本当の意味でハンスが「楽しいと考える」勉強をしていたのではない。

それは今の僕も同じだ。テストで良い点を取りた

いから、両親から叱られないように、仕方なく勉強をする。でも、そんな僕を見る度に、母は僕にこう言う。

「あなたは何のために勉強しているの。この勉強は、お母さんのためにするものではない。あなたが自分の力で、将来を切り拓くために勉強するのよ。自分のために勉強しなさい。」

ずっとその言葉の意味がわからなかったけれど、『車輪の下』のハンスと、中野先生の言葉が重なって、初めて僕の中で何かがストンと落ち着いた。勉強は、他人からさせられるものではなく、他人に見せるためにするものでもない。自分がワクワク出来る何かを見つけて、それを明らかにするために、自分自身のためにするものなんだ。中野先生の「自分が楽しいと考えるテーマを見つけて」という言葉の意味がやっとわかった時、僕はとても感動した。この東京研修で、僕はとても大切なことを学ぶことが出来た。